七百則話頭了畢之上遍歷諸老門普遂請
益真諦俗諦成就出世衆望之時以諸知識
之連署於致言上者開堂入院可許可近年
猥申降綸帖或僧臈不高或修行未熟之衆
依令出世匪啻汚官寺蒙衆人嘲者甚違于
佛制向後有其企者永可追却其身事
一新院建立之時申降　綸帖塔頭披露先規也
然近年爲私稱寺號院號事自由之至也向
後令停止事
一常住領諸塔頭領令度相改別紙錄之永可
有収納事
一諸院各塔主如先規可爲輪番但雖爲其門
一派或若輩或不器之衆可除輪番事
右條々爲寺法相續彼相定如件
元和元年乙卯七月　日
御朱印

妙心寺諸法度亦コレニ同シ但今度相改別紙錄
之ノ八字ヲ如今度指出ノ五字ニ作ル
正徳四年三寶院殿ト醍醐三院家出入ニ付テ裁
許ノ文書左ノ如シ

三寶院殿江被　仰出之御書付

一醍醐寺法流ノ事座主ノ所職タル故ニヨリテ慶長元和ノ間其宗ノ法制條目ヲ以テ三寶院御門室ニ被成下候事度々ニ及ヒ詑然則　當家祖宗ノ御旨ヲ奉ラレ彼山古今ノ事例ニ据ラレテ御門下諸寺院等嚴重ニ御沙汰アルヘキ事

一醍醐寺領ノ事慶長以來三寶院御門室ヘ寄附之御判重疊タル上ハ凡事ノ大小ニ限ラス門室ノ御沙汰タルヘキ事勿論ニ候雖然元和以來醍醐寺領ノ内ヲワカチ領スル寺院ニ　御朱印ヲ被成下候所ノ御沙汰ニ於テハ門主ヨリ其領家ヘ仰下サレ領家各其仰ヲ文ウケテ領分ニ下知アルヘキ事

一御門下諸寺院等ノ事門室ノ御沙汰ニ決セラレカタキ事有之ニ於井テハ慶長以來ノ例ノコトク京職ニ就テ其事ノ子細ヲ御申アルヘシ　御朱印ヲ帶レ候寺院領ノ事ニ至テモ或ハ門室ノ御沙汰ニ決

レカタノ或ハ醍醐寺領ノ外ノ他領ニ相
係リ候事ニオヰテハ御門室ヨリ宗職ヘ
案内ヲ通セラレ候上ニ其領家ヨリ訴出
候様ニ可被仰付事
右三條醍醐寺院家等ノ事ニヨリテ三寶院
御門室ヨリ訴申サレ候所　御裁斷之上被
仰出候所也
正徳四年甲午七月　大和守源朝臣　判
豊後守阿部朝臣　判
河内守源朝臣　判

三院家江相渡御書付
一醍醐寺座主職ノ事滿濟准后以來三寶院
門室ニオヰテ拜任ノ例タルニヨリテ慶
長元和之間其宗ノ法制條目ヲ以テ彼門
室ニ被成下候然則
朝事トイヒ國制トイヒ既ニ重疊タル上
ハ三院家等宣ク其義ヲ存スヘキ事
一慶長以來醍醐寺ノ院家不律ノ僧門室御
申ノ旨ニ就テ其法ニ行ハレ并院家其門
相模守源朝臣　判

室ニ隨身ノ儀例等其事證既ニ分明ナル
一上ハ三院家等ヨリ異同ノ論スヘカラサル事
一醍醐寺領ノ内三院家等領多沙汰之事元和以來御朱印ノ旨ニ准シテ領家ノ進止タルヘキ事勿論ニ候雖然慶長以來山上山下ノ寺領スヘテコレラ三寶院門室ニ寄附之上ハ毎事門室ノ仰ヲ承ケテ各其領分ニ下知スヘキ事
右三條三寶院御門主御申ノ事ニ就テ御裁斷之上被仰出所也

正徳四年甲午七月　豊後守阿部朝臣判

報恩院
理性院
無量壽院

三寶院殿役者ヨリ寺社奉行ヨリ相渡書付

一醍醐寺座主院家路次禮節之事被仰下之旨有之處ニ院家等各承伏ニ畢然則自今以後此等之儀軌ニ於テ乖違ノ事アルヘカラス候但院家等其官階職任ノアル所

ノ論セスシテ此等ノ禮節ヲ存スヘキ事

八座主ノ重職ヲ恭敬ノ故ニヨリ候ヘハ
御門主ヨリ院家等御接待ノ儀ニオイテ
モ彼年藺官職ノ高下淺深ニヨリテ其禮
數ノ宜キ所アルヘキ事

一醍醐寺開山之祖　贈號　宣命使登山之
時集會ニアタハサル院家等　御糺問之
次第有之ニ就テ今ニオイテハ其過ヲ悔
ルノ詞候スヘテ法會ノ場ニ臨テ御門下
ノ僧侶違失ノ事有之候ハ其僧侶ノ過誤
ノミニアラス併是御門室ノタメ不可然
事ニ候自今以後如此之事等アルヘキ時
ハカナテヨリ其類例ヲ挍セラレ衆議ヲ
會セラレ候テヨロシク擇定ラルヘキ事

一醍醐寺領ノ事スヘテ門主ノ御沙汰タル
ヘキ事勿論ニ候雖然　御朱印ヲ帶シ候
寺院領ノ御沙汰ニ至テハ御門室ヨリ其
領家ヘ被仰下其領家ハ其仰ヲウケテ各
其領分ヘ下知セシメラルヘシ然則慶長
以來醍醐寺領ノ事ヲ以テスヘテ御門室

ヘ御寄附ノ御判ヲ申サレ元和以來醍
醐寺領ノ内ヲワカチ領スル寺院ヘ御
朱印ヲ被成下候 御代々ノ御吉フタツ
ナカラ相違ノ所有ヘカラス候事

一御門下之院家ハ 朝家御祈禱ノ事其官職ノ事等
宣下セラレ并住坊造作ノ事ノ類古來ヨ
リ門室ノ御綺ヒニアラサル事ニ不井テ
ハ舊例ノ如クナルヘシ其餘京職奉行所
ヨリ下知スヘキ事ニ不井テハ御門室迄
申行ヒ御門下ノ諸寺院ヘハ御門主ヨリ
可被仰下事

一御門下ノ諸寺院許申スヘキ事有之
時ニ先其事ヲ以テ御門室ヘ申サスシ
テ京職奉行所ヘ許申シ領家ノ百姓先
ヲ其領家ヘ許申サスシテ御門室ヘ申ス
ノ類一切ニ越訴ノ例ヲ以テ裁斷アル
ヘキ事

一慶長元和ノ度々醍醐寺法制ノ御條目ヲ
以テ御門室ヘ十井サレ候御事ニヨリテ當

時ハ山上山下ノ諸寺院其言ヲ存セサルモノナク候處ニ近世ニ及ヒテ院家ノ中異同ヲ論スルノ説出來テ門室院家ノ間積怨年ヲ累ネテ終ニ訴論ニ及ヒ候然ルニ今度門主御申ノ旨ニ就テ報恩院理性院無量寿院等ヲ台下サレ御裁断事決シレ候上ハヨロシク其舊怨ヲ解レ自他ノ和合ヲ致サルヘキ事

右五條三寶院御門主御申ノ事ニ就テ御裁断之旨ニ候者也

正徳四年甲午七月　内匠頭源判
出羽守源判
山城守源判
對馬守源判

寺社奉行ヨリ三院家へ相渡書付

一醍醐寺座主院家路次禮節等ノ事院家等古ノ時ニ十井ヲ或ハ座主ニ任レ或ハ門跡ト稱スル例アルニヨリテ其異同ヲ論又若古ノ時座主ニ任レ門跡ト稱スル舊例ニヨリテ其院家等他ニ異ナルノ思ヲ

存セハ當時ニ廿レル座主ニ任セラレ門
跡ト称セラル、歿イカテカ當時ノ院家
ニ相同シカルヘキヨロシク其義ヲ思惟
スヘキ事

一醍醐寺開山之祖 贈号 宣命使登山之
日其坐位ヲ論シテ集會セサル事ニ就テ
院家等申ス所ハ灌頂萬陀羅供之時ニ院
家寺家同坐ノ儀有之事ハ此二會ニ不井テ
ハ大阿闍梨ヲ尊崇ノ義アルニヨレリ彼
會場ニ同シカラストニ云云タトヒ其宗義
ニ不井テ大阿闍梨ヲ尊敬ノ儀大日如來
ニ相同シトイフトモ釋氏四恩ノ義ヲ以
テ論スル時ハ朝恩佛恩イツレカ其輕重
アルヘキ 朝使禮待之儀大阿闍梨尊敬
之義ニ及フヘカラサル事其謂ヲ知ラス
況ヤ聖寶僧正滅度ハ八百年ノ後ニ至テ
勅贈大師号ノ事凡其法孫ニアリテ此會
場ニ相アツカルヘキ事誠ニ奇代ノ値遇
トイフヘシ共ニ不急ノ事ヲ諍フニヨリ
テ師恩ヲ令セテ相顧サル事スヘテ律義

ニ於テ相カナフ〳〵カラサル事

一朝家御祈禱并官職ノ事等　宣下セラレ其住坊造作ノ事ニ至テ門主ノ綺ヒニアサルヲ以テ三院家ニ於テハ他ノ門下ノ院家ニ同シカラス　公家傳　奏ノ觸下タル由ヲ申ス凡天下ノ事一例ヲ以テ推スヘカラス三院家等此等ノ例有之事ハ古ノ時ニアリテ或ハ座主ニ任シ或ハ門跡ト称セシ日ノ餘風猶今ニ存スル所歟

一二他ノ門下ノ院家ニ同シカラサル事

ヲ以テ當時其座主ノ門下ニアラサル由ヲ申ス事誠ニ不通ノ論トイフヘシ況ヤ遠ク其例ヲ求ルニ及ハス慶長以來三寶院門主御申ノ旨ニ就テ其院家等ノ　御以汰ヲ經ラレシ事度々ニ及ヒ許若彼門下ノ院家ニアラサルニ於テハ門主御申ノ旨ニ就テ　御裁斷ノ事アルヘカラス然ルニ三院家等私ニ其説ヲタテ、公家傳　奏ノ管下タル由ヲ申スノ條尤以テ其謂ナキ事

一醍醐三流ノ中金剛王院事古ニアリテハ
三院家ト其品格相同シトイヘトモ彼院
室廢絶ニヨリテ慶長年中三寶院御門室
ヨリ中興ノ後ハ三院家ニ准スヘカラサ
ル由ヲ以テ三院家等彼門室ノ門下ニア
ラサルノ證トス雖然金剛王院申條ニ於
テハ其院室廢絶中興ノ事アラス若三院
家申スカ如クナリトイフトモ彼門下
ノ院室ニアラサルニ於テハ恣ニ中興セ
ラル、事カナラス古ヨリ以來三
院家ト其品格相同シキ院室ノ事彼門室
ノ進退ニ任セラルヽニ於テハ三院家モ
金剛王院ト同シク其御門下ニ属スルノ
證既ニ分明ナリトイフヘキ事

一醍醐寺山上山下領之事慶長以來スヘテ
コレヲ三寶院御門室ニ寄附ノ御判ヲ
十サレ元和年中ニ及ヒテ彼寺領ノ内ヲ
分チ領スル所ノ寺院等ニモ御朱印ヲ
被成下訖然則山上山下ヲ論セス醍醐寺
領ノ事三寶院御門室ニオイテコレヲ統

領セラレ　御朱印ヲ帯スル寺院領ニ於
テハ其領家コレヲ進止シ　御判トイヒ
御朱印トイヒ其義両ツナカラ相妨クル
所アルヘカラス然ルニ近世以来其義ヲ
明ナラサルニヨリテ異同ノ論止事ヲ得
ス自今以後ハ　御朱印ヲ帯スル寺院領
ノ事ニ就テ門主ヨリ御沙汰アルヘキ事
アルニ付テハ其領家ヘ被仰下領家仰
ノ旨ヲウケテ領分ニ下知スヘシ若其領
分ノ事ニ就テ領家ノ進止ニ決シ難キ事
有之時ハ其事ノ子細ヲ以テ御門室ニ申
シ其御沙汰ヲ仰クヘシ或ハ其事門室ノ
御沙汰ニ決セラレ難ク或ハ其事醍醐寺
領ノ外ノ他領ニ相係ルニ於テハ御門主
ヨリ京職ニ案内ヲ通セラレ候上ニ領家
ヨリ奉行所ニ訴申スヘキ事
阿御朱印ヲ帯スル寺院領ノ百姓訴訟
ノ事等先其領家ニ申サスシテ御門室
ヘ申スニ於テハ越訴ノ例ヲ以テ沙汰
スヘシ領家各此旨ヲ以テ其領分ニ申

付ヘキ事

右五條三寶院御門室御申ノ事ニ就テ報恩
院理性院無量寿院等ノ院家被台下御糺
問ノ次第各承伏了忍止ハ禁行所為貴怙終
ハ國典ノ所不赦ヨロシク其旨ヲ得ヘキ由
御裁斷ノ所ニ候也

正徳四年甲午七月　日　内匠頭源　判

出羽守源　判

山城守源　判

對馬守源　判

報恩院

理性院

無量寿院

醍醐ハ上下アリ山上ノ醍醐ト山上ノ
醍醐寺ト號スル即和歌ニヨメル笠取山十リ醍醐
朱雀村上三帝ノ御願開山聖寶僧正ノ作如意輪
觀音ノ本尊トス堂前ニ靈水アリ醍醐ノ味ノ如
シトテカク号スルトソ山下ノ下ノ醍醐トイフ
寺ノ菩提寺ト号ス開祖ハ三寶院勝覺僧正即堀
川左大臣俊房公ノ男十リ歳後親王御住山四度